

黒岩 ヒストリー (第八話)



大学篇
-その1-

前号の通り共通1次試験を何とか無事切り抜け、3月3、4日と駒場の東大教養学部での東大2次試験に挑みました。1日目の国語・数学はかなりの好感触。2日目の本来得意とした英語・社会科(日本史・世界史)が今一つという微妙な結果です。

合格発表は3月20日。この日は同時に予備校入試の前日。不合格者は発表会場の東大本郷キャンパスからその足でお茶の水まで歩き、予備校に願書を届けるというのが習わしでした。何と残酷な習わしでしょう。上京の際、予備校の入試勉強をしながら列車に揺られていたのを覚えています。さて、いざ発表。恐る恐る掲示板の番号を追う私。「東大生」か「浪人生」か。私の受験番号がありました。「ヤッター」の一言を聞きつけたアメフト部に胸上げされ、もみくちゃにされながら喜びを実感したのです。

その昔「サクサク」の電報を打った時代とは違い、当時は構内の公衆電話から親元などに結果報告するのが主流。私も緑電話で父の職場に報告を入れました。電話を切る間際、父から一言「お母さんにも連絡しろよ」。見抜かれてましたね。一貫して受験に反対していた母に電話する気がないことを。しかし、父に言われては仕方ない。母の職場に電話するとあまり嬉しそうな声は聞けず。それから数十年経ち、母から「本当は落ちるのを祈っていた」と聞かされた時はさすがに驚きましたが、まあ確かにそんな受け答えでした。

翌日、アパート探しに東大の生協へ。私大の発表は既に終わっていたため、東京のアパートは残り少なで生協に頼るしかありませんでした。東大駒場キャンパス裏、徒歩1分。立地は最高ですが、築30～40年の木造2階建てアパートの1階。1DKと若干広めですが風呂がないばかりかトイレ

は共同。これで家賃4万5千円はちと高い。結局、この物件に決め、東京に住んでいる母方の祖父に保証人になってもらい、大家さんと契約書を交わしました。昨今、アパート探しに親御さんが同行する学生が大多数と聞きますが、私の時代、親と家探しをする学生はいませんでした。これも少子化の影響でしょうか。

一旦新潟に帰り、4月8日に再び上京。直接アパートに向かい玄関扉の前に到着すると、部屋の中から電話の鳴る音が聞こえます。急いで部屋に入り、押し入れの中の黒電話の受話器を慌てて取りました。一体何が。続きは次号へ。



東大合格発表
阿川佐和子さんからTVインタビューを受ける



東大駒場キャンパスにて同級生と
(下段・真ん中)

「黒岩たかひろ応援団」に是非ご入会を！

「黒岩たかひろ応援団」は黒岩たかひろの更なる飛躍を期し、会員一人ひとりがその政治活動をサポートすることを目的としております。皆様から頂いた会費は、会報の発行を含む政治活動に活用させていただいております。また、応援団ご入会の方には優先的に地域で行われる集会、座談会のご案内をさせていただいております。今後、より充実した活動を行うためにも多くのご入会をお待ちしております。

【年会費】 年額1口5,000円より

【お振込先】 郵便局：口座番号 00550-4-74787 口座名「黒岩宇洋と歩む会」

銀行：第四北越銀行 新発田中央支店 口座番号(普) 2104899 口座名「黒岩たかひろと歩む会」

会費納入にあたっての注意事項
1. 外国人からの政治活動に関する寄付を受け取る事はできません。
2. 本人以外の名義または匿名により政治活動に関する寄付をすることはできません。

まつりごと 黒岩政通信

第27号
2023年6月15日発行



6月4日幹事総会、岡田克也立憲民主党幹事長と

「決戦前夜」
復活をかけて

皆様お元気でしょうか。私は元気をふりしぼり復活をかけ必死に地元活動に励んでおります。さて、政界は広島サミットの閉幕を受け衆院解散・総選挙のタイミングに注目が集まっています。最も早いとされる通常国会会期末(6月21日閉会)に向け、与野党の駆け引きが激化。この通信がお手元に届く頃には早期解散の有無がかなり確定的になっているかと思えます。ともすれば号砲が鳴る決戦前夜の状況と言えますが、こちらはまな板の上の鯉。最も近いタイミングに振り遅れる事がないように、ネクストバタースターズサークルを整えております。

岸田政権の支持率はじわりと上昇中。広島サミットもウクライナのゼレンスキー大統領の登場もあり、「大成功」との報道も先行し、岸田政権の背中を押します。しかし、内実はそうでしょうか。岸田総理のライフワークであり、今サミット最大のテーマである核を始めとする軍縮について具体的な成果はありませんでした。むしろウクライナへの武器供与などが目立ったのは裏腹な感が致します。外交ショーと化した広島サミット。その熱気で解散となれば「大義なし」と批判はしますが、甘んじて戦うしかありません。

迎え撃つ当方とすれば、6月4日の幹事総会で後援会新体制を構築。選挙の屋台骨となります。また、次回からは新選挙区での戦いとなりますが、この間新たな地域となる新潟市秋葉区と北区の一部(旧新潟市)で徹底して活動を進めて参りました。両地区では張り巡らせたポスターで私の顔があふれ、GW以降の街宣活動で私の声が響き渡りました。この戦いは私の政治生命をかけた一大決戦。絶対に負けない勝負です。

前衆議院議員

黒岩宇洋
たかひろ

目指すは『本流政治』 - 政治家 田中角栄氏・加藤紘一氏との出会い -

私が「政治」と関わるきっかけとなったのは二人の政治家との出会いである。一人は田中角栄元総理。もう一人は加藤紘一元自民党幹事長である。

私が初めて直に見た政治家は田中角栄元総理、その人であった。高校時代、元総理が私の家の近くの体育館で演説会を開く事に。当日、私は元総理が乗り込むヘリコプターを駆け足で追いながら、人であふれかえる体育館にたどり着いた。人をかき分け初めて聞いた生の演説に私は雷のごとき衝撃を受ける。裏日本と呼ばれた雪深い新潟で苦しむ人々を救うのだ、という魂の叫びは年少の私の心にも如実に伝わった。

進学で上京した際には目白邸を訪れたい、と考えていた私であったがその願いはかなわなかった。私が進学する1985年4月の2カ月前に元総理が脳梗塞で倒れたからである。こんな経緯を知ってか母が「自分の同級生の国会議員を訪ねたら」と紹介してくれたのが当時防衛庁長官を務めていた加藤紘一衆議員であった。大学入学直後、議員会館の加藤事務所を訪れるとその場で事務所を手伝う事に。程なく、加藤先生の愛子夫人から長男の家庭教師を頼まれ、私の秘書見習兼家庭教師生活がスタートしたのである。

田中角栄元総理と加藤先生に共通するのはどちらも「保守本流」派閥に所属し



黒岩の妹の義父・渡辺肇元衆議院議員（左・委員長席）と田中角栄元総理

た点にある。自民党の保守本流と言え、吉田茂元総理に繋がる系譜。所謂「吉田学校」の池田隼人元総理と佐藤栄作元総理へと継がれる派閥である。池田元総理は「宏池会」の創設者で加藤先生はその後、宏池会の領袖となる。佐藤元総理の派閥を継いだ田中元総理はその派閥を自らの田中派（木曜クラブ）へと衣替えをする。吉田学校・保守本流政治の路線は「軽武装」「経済重視」。戦後復興の為に防衛には殊更力を入れずとも徹底して経済回復を目指し、「ハト派」と呼ばれる事もあった。対するは岸信介元総理の系譜で現在の安倍派（清和会）である。保守傍流と呼ばれた路線は「自主憲法制定」「民族自決」であった。再軍備にも積極姿勢を示し、故に「タカ派」とも呼ばれる。



渡辺肇氏の結婚式で仲人を務める田中角栄氏

現在の岸田総理は宏池会の会長である。しかし、防衛費の倍増・増税を見る限り保守本流の跡形もない。経済に至っても物価高の折、防衛費では増税、少子化対策では社会保険料の増額と国民負担は増すばかり。所得倍増を実現した池田元総理はさぞかし泉下でお嘆きの事であろう。

政治の要諦はいたってシンプル。悩んだ時、弱った時、病んだ時、そんな「困った人」に手を差し伸べる事である。困らぬ人に手を差し伸べるほど政治資源は潤沢ではない。だからこそ一昔前の自民党は、いや与野党なく政治は「分厚い中間層」

を作る事に血道を上げた。中間より下層に落ちる人を救い、その為には上層にいる人に相応の負担を求める、という常道を選択してきたのである。



加藤紘一（中央）家のXmasパーティー
教え子を抱く黒岩（右から2番目）

翻って、小泉政権以降競争原理が社会全体に導入され、それまで一般的には口の端に上らなかった「格差」が社会をおびたたくむしばみ出した。この現象は21世紀の大部分（16年間）を3世以上の世襲政治家が総理（小泉、安倍、麻生、岸田）を担ってきた事と関連するのだろうか。私にはこれら世襲総理に当事者意識が感じられない事こそ国民から不信、不評を買っている原因に思えてならない。即ち、地方が衰退しようが弱小産業が壊滅しようが自身は困らない、いつでもどこでも勝ち逃げしそうな匂いを国民は嗅ぎ取っている。格差の拡大につれ国民感情のささくれは激化し、羨望・嫉妬の嗅覚は鋭くなるばかりである。確かに人は生まれを選べない。渋谷で生まれ、何不自由なく育ったであろう岸田総理を羨んだり、ましてや責める気など毛頭ない。ただ、人間は最も想像力に長けた生き物なのだから地方生活や一次産業の経験がなくとも想像すればいい。想像できないのなら岸田総理は今からでも広島を一から歩くしかない。

保守・革新という言葉は今や虚構であり、死語に近い。故に政治において保守

本流か否かを問う意義はなくなり、問われるべきは本流か否（亜流）か。政治の本流とは他人事（国民）を我が事に思い遣る政治である。当事者として想いを馳せる政治である。亜流とは利己的、または一部特定の集団の利便を図っている、と国民に感じさせる政治である。国民はこの違いを理屈抜きに肌感覚で感じ取っている。儒教の世界では人を思い遣る心を「仁義」と言う。仁義なき政治に日本の明日はない。血の通ったリアルな本流政治が今こそ求められている。

『闘う後援会』新スタート

6月4日の黒岩たかひろ後援会幹事総会にて「闘う後援会」として新スタートを切る事となりました。

「重厚な布陣、若返りも断行」

まずは「3区後援会」の顧問に鬼嶋正之さん。鬼嶋さんは旧紫雲寺町長を長く務めた3区政界の重鎮です。また、片野たけし県議（村上市・岩船郡選出）と小島すすむ県議（新潟市秋葉区選出）が新たに副会長に就任。3区全体の最北端から最南部までをカバーして頂けます。小林まこと県議（新潟市・北蒲原郡選出）には事務局長についてもらう事に。誠に重厚で幅広い布陣を敷く事ができ、「闘う後援会」の陣形が整いました。

地域後援会も役員を一新。11ある地域後援会の内、7後援会で会長・幹事長が交代。また若返りの目玉として五泉市後援会で平田光一郎新会長（52歳）、北区後援会で宮尾浩史新代表幹事（58歳）、秋葉区後援会で今村達弥新会長（59歳）が就任。更に女性後援会「宇の花会」では寺久保瑞穂新事務局長（49歳）が誕生しました。皆さん私と同年代か年下です。後援会組織として重厚な布陣に加えて新陳代謝もはかり、次回選挙で必勝を期します。